

きくちだいじろうどうしかい

菊池大二郎同志会だより

第7号 平成27年8月28日発行 菊池大二郎同志会広報部

僕の前に道はない

僕の後ろに道は出来る

高村光太郎『道程』より抜粋。

① 日本は今。

皆様、いつも応援ありがとうございます。菊池大二郎でございます。さて、日本は今、戦後70年という節目の年を迎え、皆様もご存じの通り、日本各地で様々な議論が飛び交う今日この頃でございます。思うに、70年という歳月をかけ、平和そのものに対する考えや価値観も十人十色になってきたような気が致します。例えば、若者世代（主に10代～20代の方々）によるデモ活動等の活発な動きも多く見受けられます。その根底には、若者自身がごく身近な周囲との連帯感や協調性を大事にしたいという思いがあるような気が致します。つまり、若者が守りたいのは日本国という、より大きなものより、愛する人であったり、友達であったり、手の届く範囲の幸せ＝自分の幸せ、なのではないか。確かに、平和というのは、そういった身近な安泰や幸せの集まりなのかもしれませんが、いずれにしても平和という考え方も様々な色をもってきたと存じます。

また、来年より18歳から選挙権を行使できるようになり、報道を通じても若者世代が大変注目されております。

そこで、先述致しましたが、若者について少し考えてみますと、その多くは、競争社会・資本主義社会・経済的な価値（カネやモノ）と一定の距離をとりたいという考えが強いように思うのです。一方で、社会というものを冷静にとらえ、「世の中の役に立ちたい」という価値に重きを置いているような気も致します。現に、我々が日々目にする報道を通じての若者の言葉にも力強さがありますし、平和デモを行うというその行動力がその証ではないでしょうか。いずれにしても、この選挙制度が形だけのものとならぬよう、私自身も若者との交流に努めて参りたいと存じます。

人間とは忘れる生き物です。世代を超えての平和の願いも若者の選挙権取得の感動も例外ではないかもしれません。我が国の高度経済成長の裏には、はかなくも隣国をはじめとする戦争の軍需景気があったこともすでに忘れられているかもしれません。忘れられる幸せ、忘れることで生きていく人間の強さ、忘れてしまう人間の愚かさ・恐ろしさ。私も含め、若者としてしっかり勉強して、日本国民として誠実に生きていきたいと感じる今日この頃でもあります。

② 第一に試されていること。

人間には決して許すことのできないことがあります。多いか少ないかは別として、私にだっ
てでございます。人から言われたこと、されたこと・・・等、忘れられないものもあれば、時間をかけて癒やしていくもの、程度は様々です。生きていくには誰とも無縁でいられるはずもなく、縁があって点と点が線になり、線がまた面となり、世間となり、社会となり・・・我々は何か
に属して生きている以上、いずれは人を傷つけ、己も傷ついて生きています。

この村山市内、各自治会内、職場やご友人等様々な共同体を見回してみてください。好きな



徳内まつりにて馬翔會の一員として市民山車にも参加。

人以上に嫌いな人もきっと同じぐらいおるかもしれません。私たちはその方々と手を取り合えるのでしょうか。「村山市を元気にしたい」等、そういった漠然とした思いは、きっと皆様の心の中にもあるはずですが、純粋なその思いを形にしようとする、どうしても手を取り合えなくていつの間にか心の火も消えてしまう・・・このような繰り返しではなかったのかと正直思うのです。

ですが、事実はひとつではありません。心がある限り、その分だけ事実は存在するように思うのです。分かり合えないこともあるでしょう。でも、分かろうと努力したり、理解できる可能性がある部分だけでも手を取り合ったりする「勇気」を我々は持たなくてはならないと思うのです。そう言う私自身が、これから試される機会が特に多いのかもしれない。

ですが、村山市の大事はこれから一部の方だけでは出来ません。単なる批判ではなく、未来志向で時には厳しく議論もし、時には最大限に協調しあえる、勇気をもった「志民（市民）」にならなくては、きっと何事も上辺だけの施策に終わってしまうと思うのです。

変えるべきは、政治的なことや大きいこと以上に、我々ひとりひとりの心意気や意識、度量ではないかと。そう強く思うのです。

③ 考え。

本来、政治家が為すべきことは策の提示ではなく「いかに決断するか、決断できるか」ということだと私は考えます。この考え方は、過去のたよりでも度々載せております。策については私以上に素晴らしい考えをお持ちの方が市内外にもたくさんいらっしゃいます。一軒一軒歩き、それをとても痛感しています。情報を集めるに優れた人、分析に優れた人、発想に優れた人、たくさんいらっしゃいます。ですが、私なりに今考えている一部を簡単にご提示したいと思います（以下、文字数の関係上、常体・口語調にて失礼致します）。

(1) 村山市独自の選挙制度を構築へ

投票率の低下は著しい（30年前までは90%超えがほとんど。地区によっては100%も達成している）。投票率は市外に向けた村山市の意思表示そのもの。選挙に行けない高齢者をすくい上げるための交通ネットワークや投票所近辺でのイベント開催（家族みんなで行きたくなるような環境創出）、世帯毎の投票率に応じた税率軽減策（還元策）等を用いて、「行きたくない」から「行きたくなる」といった投票の概念を全く新しいものへ。

(2) 市議会議員定数削減の更なる検討と一体的な行政制度改革へ

不透明かつ性急な行政委員の改革に着手されておりますが、現状を正確に調査・分析しながら一部ではなく一体的な改革が必要。また、二重、三重行政を解消するという趣旨を明確にし、例えば、議員定数削減・行政委員制度・各協議会制度・自治会等を地域の特性も考慮しながら、一体的かつ視覚的に納得のいく形で見直していく必要があると考える。

(3) 市役所内の労働環境の調査・改革へ

地方公務員といえども、公平・中立・公共性の地位の点を除けば、一般的な労働者としての視点が尊重されてしかるべき。私も長らく労働問題に携わってきたが（法律の範囲内で）、普通の企業でいえば異常事態ともいえる由々しき事態に陥っていることを今の市民のどれほどが認知（周知）しておるか。一般企業と同様に、例えば、秘密保持を大原則とする対策室や相談室を設ける等、行政マンに能力を最大限発揮できる環境づくりを推進させたいものだ。

(4) エネルギー自立都市を目指して

数年前からすでに始まっている環境都市・むらやまの構想を再確認し、繰り返し提案するように水力や風力をも活かしたエネルギー創出の構想づくりを。例えば、日本三大急流であり、かつ全ての難所が本市に集中しているという自然力を活かせる手はないだろうか。（例えば、市内にある県環境センターや市内企業を軸とした技術開発協力等）



最上川三難所の「隼（はやぶさ）」の風景

(5) 子育て支援を多角的な視点からサポートする体制作りへ

目に見える金銭的な支援も重要。だが、子育ての裏に潜むひとつの問題は親世代の労働（雇用）条件や環境ではないか。統計的にみても、「働く」という壁が立ちただかり親子で向き合う時間が少ないと思える。実際に、改正次世代法により認定事業も行われ、ワーク・ライフ・バランス（仕事と家庭の両立）につき声高に叫ばれており、市内企業等でも率先して素晴らしい取り組みをなされているところもあるが、認定基準の高さ等から本市には馴染まない部分も正直ある。そこで、現状等も十分に調査・分析しながら、市内企業等との協力・連携によって、小学就学前の保育だけではなく、小学就学以降の親世代も含めた環境整備を急ぎたい（例えば、企業内独自の支援策や取り組みを本市独自の基準で認定→補助金や広告にて最大限の支援をする）。

(6) 楯岡地区東部・北部開発の再確認、そして加速へ

舗装工事が終了した徳内シーボルトライン。周辺地域の開発計画を再確認して、早急な実現を望みたい。徳内神社も同ライン上にポツンと建立されているが寂しさがつるばかりである。例えば、本市の人口は減っているが、一方で急激に増えているものがある。ペットである。ペットふれあい広場づくりも計画の一部であり、実現できれば人間と動物の共生の象徴になるはず。更に、「レイクランド東沢」を彷彿させる温泉利用施設も市内東部の健康増進の拠点として期待感が高まる。また、名実ともに長崎の風景を思わせるような街道にして、土日だけ西洋風の馬車が通れる環境整備をするのも面白いだろう。

また、いわゆる北部開発も忘れてはならない。例えば、市内楯岡鶴ヶ町（県道294号線）の交差点から居合神社までの北伸工事につき、市の概算は出されているようですが、実際に計画が進行されておる雰囲気は感じ取れない。



(上) 工事中のシーボルトライン

(下) 未整備のままの北部開発

(7) 高齢者の活力を活かした都市計画の拡充や地域おこしへ

本市の高齢者率も3割を超え、超高齢者自治体へ歩みを進めている。だが、高齢者支援にも村山市独自の発想はないものか。私は、本市の高齢者ほど元気な方々はいないと自負している。高齢者の方々の活力を大いに活かしていくことも、健康増進として支援のひとつではないだろうか。現に、多くの方々が「おらだば、使ってけろ」と口々におっしゃっている。前述の開発事業の一部を担ってもらったり、耕作放棄地や里山整備につき各自治体や任意団体に低廉で貸付け、行政や6次産業化の主体として力を貸してもらったりと、人の恵（高齢者の元気）と知恵と自然の恵を最大限に活かしていきたいものだ。

(8) 北村山地域（広域）をひとつの単位という視点をもって、オンリーワンの村山実現へ

消滅可能性が高い自治体のひとつである本市。今こそ勇気をもって、北村山一円を単位に村山の存在価値を高める視点を持つことも長い目で見れば、過疎脱却の足がかりになるのではないか。住居水準充実度（住居延べ面積、持ち家比率を基礎）が全国3位という評価をもとに、「住宅の村山」を推進。企業誘致型や学園都市型等様々な構想はあるが、勇気をもって郊外をも利用したベッドタウン型への舵取りを検討。現に、出産が期待される若年女性の増進率が高い自治体の多くがベッドタウン型で成功している。勿論、企業誘致型や学園都市型を否定するわけではないが、目先の雇用創出は持続的な面で危険と隣り合わせでもあるので、この点も含めて大いに議論したい（本号では掲載できませんでしたが、楯岡高校跡地問題にも通ずる）。また、震災に強いという点も大いに村山の宣伝力として活用していきたいものだ。

(9) ふるさと納税をはじめとする、発信力の抜本的な見直しを

近年、ふるさと納税が加熱しているが本来の趣旨を忘れていくように感ずる。そもそも、本

市のように過疎等による税収が減少している自治体に対しての格差是正を推進するため、特定の自治体を「応援したい」「恩返ししたい」という感情を制度化したものが本制度である。昨今では、寄附に対する「モノ」「サービス」を軸とした発信・広告のみへの注目が先行してしまっており、本市も含め、腹のすわった独自の発信や展開が行われておるとは言い難い。確かに、本県天童市が今年度の寄附金額で暫定1位であり、そうした姿勢・路線に学んでいくことも勿論大事だが、本来の制度趣旨に立ち返り、例えば、一定の基準を設けたうえで、本市出身者を中心に本市の行政に参画できる制度を構築するのもよい（現に、政府が進める「国家戦略特区」につき、そのような奇抜な提言が出されている）。いずれにせよ、本市から転出していった全国に散在する準市民を広告塔にできるような本市独自の制度やサービスを構想すべきであり、とらわれがちな目先の発信力（文字、色、デザインやホームページ等）から視点を少し変えていく必要があるのではないかと（過疎を受けたということは、その分市外に出て行った村山市民が多いということであり、これを活かさない手はない）。

(10) 雪に対する概念・認識をくつがえす

市外へ転出してしまう一番の理由が雪の問題といっても過言ではない。言い換えれば、雪を多角的に克服できれば、転出を防ぐ、又は転入を期待できることになる。確かに、間口除雪や完全除排雪も素晴らしいことだが、必ず降ってくる雪に対する見る目を変え、「嫌雪」から「好雪」になるプロジェクトの立ち上げを是非行いたい。例えば、市内企業の技術力を軸に雪を活かしたエネルギーの開発、雪を使った全国的な教育事業の展開（全国には雪が一度も降らない自治体もあるはず）、雪害救済に生涯をかけた松岡俊三侯を中心とした文化事業（例えば、雪に関する総合的なミュージアムの設立）、雪を利用した暑さ対策の開発やその全国拡充を構想する等、雪ひとつとっても私の中では夢が広がるのだが。

(11) 村山市の埋もれた文化財産等の精神性に触れ、芸術・文化事業の大いなる推進へ

市内にはこれまでどれほどの文化的偉人がおられたか。過去だけでなく現在も文化活動の第一人者や才能を持たれた方々がたくさんいる。また、市内にある各文化財産等（山岳、神社等含む）の由来や歴史、そしてその根底にある精神性をここに息づく我々がどの程度知っているだろうか。市民レベルでまずは着手し、行政をも巻き込んで一貫性のある事業を構築しよう。例えば、年に一回ある徳内まつりについても、原点（その歴史や文化的精神）をもう一度全体で共有・継承していくための作業が必要ではないだろうか。思いや精神に触れ、個々の日常生活に活かされて初めて、継続可能な文化になっていくはず。

一方で、利活用可能な観光（環境）資源を活かす観点から、山岳や平野、最上川の景観の揃った場所にて、民謡やクラシック、ロックやグループサウンズを一堂に会しての大々的な音楽フェスティバルや大衆文化フェスティバル（いわゆるサブカルチャーやオタクといわれる文化）を実現させ、郷土史と相まった、クールジャパンならぬ「クールムラヤマ」を内外に発信していくのも非常に興味深いと思われる。



村山駅前小便小僧由来碑除幕式の光景。
産業高校の皆さんの活躍が期待される。

以上は、編集の都合上、一部に過ぎません。これからも機会をみて発信して参ります。

上記の点を踏まえて、財源をどうするか等課題は山積しておりますが、夢やダイナミズムの視点は忘れてはいけないと思うのです（盆や正月旅行を楽しみに家庭での節約も頑張れるというものです）。「ダメだ！ダメだ！」では何も生まれません。例えば、政府がこの度進める「国際戦略特区」に、本市も真剣に名乗りを上げる、といった大胆さも必要ではないでしょうか。私も含めて、多くの方々が、村山市政の歴史に学び、肩書きや立場を一度脱ぎ捨て、一個人として真剣に議論する勇気をもって進まなくてはなりません。

井の中の蛙（かわず） 大海を知らず されど空の青さを知る